



Keisuke Yamada



Takahito Yamashita



Masato Ikeguchi



Shutaro Kato



Yoshiaki Murata



Takayuki Okada



Hirofumi Kokubu



Naoyuki Fujita



Masahiro Kobayashi



Toyohiro Kayanuma



Dang Anh Trung



Yukio Kusuhara



Kenji Yamasaki



Kohei Miura



Naoko Yoshida



Tsutomu Ben Hosaka



Akira Tsujioka



Masato Naka



Hiroaki Hajota



Kiminori Yano

技科大の顔

10

2025年 冬号

同窓会と以下の在学生が協力し、制作・配信しています

機械工学系	石黒 仁大
電気・電子情報工学系	内藤 初月
電気・電子情報工学系	久野 優
電気・電子情報工学系	母良田 友
建築・都市システム学系	末廣 杏月



山田 啓輔

Keisuke Yamada

2016年 機械工学専攻 修了
安井利明 研究室1991年 岐阜県生まれ
岐阜高専 卒業2016年 トヨタ自動車株式会社 入社
現在に至る

子供のころから車が好きで、将来は自動車関係の職に就きたいと思っていました。そこで機械工学の道へ進むことを決め、岐阜高専機械科へ入学しました。岐阜高専ではエコランという部活に所属し、50ccバイクエンジンを搭載した車の設計・製作に注力した高専生活を送りました。豊橋技科大でもその流れを引き継ぎ、自動車研究部に入部し、学生フォーミュラマシンの設計・製作を行いました。ここでも部活動にのめり込み、4年間をほぼ部活に捧げた学生生活でした。そのきっかけは、学生フォーミュラ大会に初めて参加した際のことです。大会には各チームがマシンの設計力を競う審査があり、他チームが「何kg軽量化し、ダウンフォースを何kg増やせば、タイムが何秒向上する」といった報告をしていました。年齢の若い学生たちが示す知識や技術の高さに衝撃を受け、自分の全力がこの世界でどこまで通用するか試したいと思うようになりました。学校で工学を学び、部活動でそれを実践する過程では、うまくいかないことも多くありました。成功したときの喜びは大きく、機械工学の醍醐味を味わえた学生生活でした。現在は子供のころの希望が叶い、トヨタ自動車株式会社にて設計業務や企画業務に携わっています。仕事においても、学生時代に得た経験が大いに役立っています。

周りと競い合いながら研鑽を積み、実践することで初めて学べることがあると日々感じています。自由度が高い学生の間に、皆さんもぜひ多くのことに挑戦し、より実りある学生生活を送っていただければと思います。私自身も、学生時代に培った挑戦する姿勢が現在の成長につながっていると実感しています。皆さんの今後の活躍を心から応援しています。



池口 真人

Masato Ikeguchi

2004年 生産システム工学専攻 修了
森謙一郎 研究室1979年 長野県生まれ
長野高専 卒業

2004年 KYB株式会社 入社

2008年 株式会社IHI 入社

2017年 同社 回転機械エンジニアリング出向
現 在 同社 生産センター 辰野工場
品質管理グループ グループ長

私は長野高専から編入し、森謙一郎先生ご指導の下、当時の塑性加工研究室（後の極限成形システム研究室）でステンレスの深絞り加工に関する研究をさせて頂いておりました。卒業後は自動車好きが講じてKYB株式会社に入社、自動車用油圧機器の生産技術部門へ配属となり、量産ラインの制御設計を担当しておりました。その後、ご縁があって株式会社IHIへ転職、LNG等のガスハンドリング設備の制御・計装設計業務を経て、現在は品質管理エンジニアとして活動しております。本業については、高速回転体や高压ガスを取り扱うという技術的な面白さを感じつつ、工場部門の泥臭い業務に日々翻弄されながら楽しく（？）過ごしております。今回は、いくつかの企業や部門で仕事をした経験から感じたことについてお話ししたいと思います。経験にもある通り、私は前職では生産技術、また現職では設計や品質管理というような部門を経験してきました。その中で気付いたのは、「無駄だった」と思う経験は一つもないということです。楽しかった経験も苦労した経験も、全てが自分の力になっています。また、他の職種や部門での経験を重ねたことで自分自身の視座が上がり、組織全体を俯瞰して個々の課題をより深く理解出来るようになりました。さらに、その過程で築いた人間関係も、今の自分にとって大きなアドバンテージとなっています。どんなにAIが進化し、生産を支えるシステムが高度化しても、やはり最後は「人ととのつながり」が大切だということを実感しています。皆さんも、これから社会に出て色々な経験を積むことになると思いますが、その一つ一つが必ず自分の成長につながります。どんな環境に置かれてもぜひ前向きにチャレンジしてみてください。



山下 貴仁

Takahito Yamashita

2015年 機械工学専攻 修了
寺嶋一彦 研究室1988年 愛知県生まれ
名城大学附属高等学校 卒業
2015年 株式会社ニッセイ 入社
2020年 株式会社ニッセイ 退職
2020年 青山学院大学 理工学部 助教着任
2024年 青山学院大学 退職
2024年 株式会社ニッセイ 入社
現 在 同上 技術本部 技術部

ものを作ることが好きで、ロボットコンテストへの憧れもあって普通科高校から技科大に進学しました。文系科目（特に英語）が苦手で、理系科目も高専出身の同級と比較して専門性が乏しかったので、学部時代は毎日コンピュータ室にこもって必死に勉強していました。ロボコンの活動がお手伝いや事務ばかりだったことが心残りではありますが、結果として幅広い知識を身に着けることができ、また色々な事にアレルギーを起こさず取り組めるようになりました。

博士後期課程を修了し、一度目に会社員になってからは、電気の分野であるモータの設計開発に携わり、モータを回すためのアンプ、さらにはその制御のプログラム開発にも挑戦しました。その後、「試作でどんなに性能が良いものでも、量産できなければ世の中に出せない」と言われたことがきっかけで、退職し大学教員になって研究を通じて生産技術（特に自動化技術）を身に付けました。この期間は視野を大きく広げることができた貴重な時間でした。また専門の振動制御、ロボット、会社で関わったモータ以外の研究に携わった学生を指導できたことは母校でいろいろ学んでいたおかげでした。

現在は再び会社員として人の仕事を少しでも楽にできる生産設備を設計しています。今の目標は「自動で何でも量産できる会社」にすることで、この目標が達成できたら、もう一度夢のアクチュエータ開発（製品として世の中に出すこと）に挑戦したと考えています。

在校生の皆様、大学で過ごせる時間はとても大切でその気になれば何でも勉強できます。卒業に必要ではない講義も受講してみると視野を広げ、意外なところで自分の助けになります。



加藤 周太郎

Shutaro Kato

1995年 エネルギー工学専攻 修了
高木章二 研究室1969年 東京都生まれ
愛知県立豊橋南高等学校 卒業
1995年 トヨタ車体株式会社 入社
現 在 同上 プラント環境生技部 主任

1988年に、地元の普通科高校から地元の豊橋技術科学大学エネルギー工学科へ入学しました。父親が豊橋の出身で転勤族だったので、小学生のころ「豊橋にすごく良い大学ができた」と嬉しそうに話していたのが技科大のことを耳にした最初だったと思います。最初の授業で教授から、新幹線の車輪とレールの接触部分はどのような形になっているかとのお話をしていただいたことが自分のエンジニアとしてのスタートでした。授業は私にとっては本当に難しく、マイペースでしっかりと！と言う戦略でじっくり時間をかけてすすめました（笑）。学生生活では大学3年生に編入してきた高専卒の友人とともに一般向けのものづくりのコンテストに登場し、入賞しました。その楽しさが忘れられず、4年生の時にNHK大学ロボコン出場へ参画することになりました。当時のロボコンは夏休みのほぼ2ヶ月間の短期決戦でしたが、本当に寝食を忘れて全力投球できたことは素晴らしい経験でした。この時の仲間と「ロボコン同好会」を設立し、今や日本屈指の強豪校となっているのはうれしい限りです。皆様に応援いただいていること大変ありがとうございます。修了後はトヨタ車体株式会社に入社。25年間生産技術部門で塗装設備の立ち上げを、国内、海外で行った後、2021年からは国内、海外の子会社のカーボンニュートラル施策の支援に携わっています。今、自動車業界は100年に1度の大変革期と言われており、私も常にアップデートが必要となっております。そのベースとなっているのは、技科大の理論と技術のバランスの取れた教育と、ロボコンで培った、“何とかする力”だと思います。現役の皆様の充実した学生生活とOBの皆様の益々の活躍をお祈り申し上げます。



村田 芳明

Yoshiaki Murata

2021年 電気工学専攻 修了
櫻井庸司 研究室1993年 大阪府生まれ
大阪府立大学高専 卒業
2021年 株式会社 東芝 入社
現 在 同上 総合研究所 研究主務
新電池開発部門 チームリーダー

2014年に大阪府立大学高専（現・大阪公立大学高専）から豊橋技術科学大学の電気電子情報工学課程に編入しました。研究室では櫻井先生、稻田先生のご指導のもと、博士課程までの6年間、カルシウムイオン電池の研究に取り組みました。今振り返ると課題の多い系でしたが、幅広い視点から知識を深めることができたと感じています。給付奨学金など研究に没頭できる制度を活用させていただいたことも大きな一因です。2021年に東芝へ入社し、企業での電池研究開発キャリアをスタートしました。入社当初は、スケール感の違いや製造プロセスなど企業特有の要素に戸惑い、これまでの感覚が大きく変わることに驚きました。しかし1年ほど経つと、逆に自分が培ってきた知見が強みになっていることに気づきました。特に、難易度の高いカルシウムイオン系に関する最前線の知識に加え、「電池には役立たないかも」と思っていた高専での電気回路や機械工学の基礎、技科大で身につけたプログラミングスキルなど、これまでの学びが化学を専門とする人が多い職場で大きな武器になっています。未知の系を対象に新たなアプリケーションを提案しながら研究を進める総合研究所では、化学だけでなく応用を考える力が求められますが、この力は多様なバックグラウンドから生まれていると、最近つくづく感じます。幸運にも電池技術委員会賞という大きな賞を頂き、また新電池領域のテーマリーダーを任されるなど成果にもつながっています。当時の自分と同じように、やりたい研究に直接関係しない講義を億劫に感じることもあるかもしれません。しかし、獲得した知識や経験は、どれだけ浅くても必ず財産として根付きます。そのことを後輩に伝えたいと思っています。



國分 洋文

Hirofumi Kokubu

2002年 電気電子工学専攻 修了
榎原建樹 研究室1977年 三重県生まれ
鈴鹿高専 卒業
2002年 石川島播磨重工業株式会社 入社
2008年 松下電器産業株式会社 入社
現 在 パナソニックエレクトリックワックス労働組合
電材&くらしエネルギー支部 副支部執行委員長

大学生活するために、豊橋で一人暮らしてから、早いもので27年が経とうとしています。大学では、高専時代にはできなかったことに挑戦したいという想いから、技科大祭実行委員会に所属しました。当時の仲間とは、現在でも年に一度集まり、さまざまな情報交換を続けています。技科大祭実行委員会で身に付けたスキル、特にコミュニケーション能力は、現在の労働組合専従としての業務において大いに活かされていると感じています。

研究室は榎原・滝川研究室に所属し、自然エネルギーに関する研究に取り組みました。研究室で燃料電池に強い関心を持つようになり、燃料電池に関わる仕事に従事したいとの想いから、石川島播磨重工業株式会社（現 株式会社 IHI）に入社しました。その後、松下電器産業株式会社（現 パナソニック株式会社）を含め、約20年間にわたり燃料電池の開発業務に携わってきました。学生時代には、近い将来、燃料電池が普及し、少なくとも20年後には日本の電力構成は自然エネルギーが主体になるだろうと夢見ていましたが、現状は当時の想像ほど変わっていないように感じています。

2022年からは、それまでの開発業務を離れ、労働組合の専従として労働運動に関わる仕事に従事しています。日々、さまざまな価値観を持つ組合員や経営者と向き合い、共感したり、感銘を受けたり、時には悩んだりしながら業務にあたっています。その中で私が大切にしているのが、「現場に足を運び、現物を見て、現実を知る」という三現主義です。現場を知らず、机上の空論を語る責任者が少くないのが現実だと感じています。皆さんもぜひ、現場・現物を大切にし、物事を考えていただければと思います。ありがとうございました。



岡田 貴行

Takayuki Okada

2007年 電子・情報工学専攻 修了
石田誠 研究室1979年 静岡県生まれ
沼津高専 卒業
2007年 株式会社東芝 入社
2017年 東芝メモリ株式会社
(会社分割による承継)
2019年 キオクシア株式会社(社名変更)
現 在 同上 アドバンス・デバイス
開発第一担当 参事

私は在学中、集積回路研究室(ICG)に所属し、デバイス特性や機能性薄膜に関する研究を行い、大学院修了後は東芝セミコンダクター社（半導体メモリ事業が分社化しキオクシアになりました）に入社し、次世代半導体メモリの開発に従事してきました。入社初期には強誘電体や磁気メモリといった機能性薄膜を用いた不揮発性メモリの基礎開発において、成膜プロセス技術やデバイス素子技術の開発に携わりました。その後、現在の主力製品である3次元フラッシュメモリの開発に参画し、プロセス・デバイス両技術の経験を活かして『記憶』素子部のプロセス開発から最近では製品コンセプト策定、製品試作の検証、量産への製品移管まで多くの開発、量産メンバー共に取り組んでいます。大学での基礎研究としてのアプローチと、入社後の製品化を目指したアプローチは、基盤技術、手法、リソースに大きな違いはあるものの、大学時代の研究室での日々の議論と多くの実験を通じた試行錯誤の経験は私のキャリアの礎となっており、これにより自身の携わった製品の実社会流通という達成感を味わうこともでき、今日の充実した日々につながっています。

当時においても半導体技術はモバイル化を支える情報化時代の牽引役でした。それが今日ではAI、自動車、医療といった日常生活の隅々まで浸透しており、今後は社会そのものを形づくるコア技術に進化していくことが期待されています。学生時代の多くの経験や交流はこの実現に不可欠な新たなイノベーション創出の種になってきます。日々の些細な出来事から感じる自身の『知的好奇心』を大切にして、様々なことに取り組むことで充実した学生生活を送り、新たな社会の創出に関わっていきましょう！



藤田 直幸

Naoyuki Fujita

1988年 電気電子工学専攻 修了
藤井壽崇 研究室
1963年 大阪府生まれ
大阪府立高専 卒業
1988年 松下電器産業株式会社 入社
1992年 大阪府立工業高等専門学校
電子情報工学科講師(1997年准教授)
2004年 国立高等専門学校機構奈良工業高等専門学校
電気工学科 准教授
2008年 同上 教授 現在に至る
その間9年間豊橋技術科学大学 客員教授

府立高専5年時に、指導教員だった井上光輝先生（現技科大副学長）に勧められ、技科大へ編入学しました。藤井壽崇先生と共同研究者の井上先生のご指導の下で修士課程を修了後、民間企業勤務を経て高専教員となり、1999年に、両先生のご指導により論文博士号をいただきました。先生方の「人のやらないことをやる」という教えのもと、電気系の研究室では珍しい電気化学的な手法での磁性薄膜作製に取り組み、これが私の研究生活の基盤となりました。

高専教員になってからは、技科大との連携に努めてきました。学生を引率しての技科大見学ツアーを実施し、教え子から多くの編入学生を送り出しました。また、技科大からのご支援を得て「全国高専－技科大マテリアルサイエンスフォーラム」を立ち上げ、材料系教員の共同研究の場を設けたことも、思い出の一つです。高専機構の男女共同参画室併任教授時代には、技科大にご協力いただき、「めざせ高専研究者の道」という事業を展開して、技科大在学生に高専教員職の魅力を広報する機会も設けていただきました。

専攻科長時代に、若原先生（現学長）や他高専の先生方と協力して立ち上げた、技科大卒業と専攻科修了を同時に実現する連携教育プログラムは、制度設計に大変な労力を要しました。それでも、私の研究室から2名の学生が武藤先生との共同指導を経て無事卒業できたことは、苦労が報われた瞬間でした。

私の教育者・研究者としての歩みの中で、母校技科大との連携は常に大きなウェイトを占めてきました。技科大の皆様にお世話になり続けた教員生活も残り1年となりましたが、今後とも高専と技科大の連携が、日本の技術者教育の発展に寄与することを心から願っております。



小林 真佐大

Masahiro Kobayashi

2021年 情報・知能工学専攻 修了
渡辺一帆 研究室1993年 三重県生まれ
鳥羽商船高専 卒業2021年 豊橋技術科学大学
情報・知能工学系 研究員2021年 同大学 情報メディア基盤センター 助教
現在に至る

2014年に豊橋技術科学大学に編入学した後、そのまま博士後期課程まで進学し、2021年に博士（工学）を取得しました。現在は情報メディア基盤センターで助教を務めています。気づけば、豊橋での生活も12年目となりました。大学入学当初は学部卒で就職することを考えていたので当時の自分からすると予想外の進路です。在学中は渡辺先生の研究室に所属し、機械学習の研究に取り組みました。具体的には、機械学習アルゴリズムの改良やその統計的性質を数学的に解析するという研究です。研究を進めるうちに機械学習の理論的側面に興味を持つようになり、現在はより理論寄りの研究にシフトしています。とはいっても大事ですので得た成果を何らかの形で応用できればと考えています。

現在所属している情報メディア基盤センターでは、学内の情報基盤やネットワークの維持・管理、セキュリティインシデント対応等をミッションとしています。私自身も学内に導入する各種情報システムの仕様策定や技術審査、導入支援などの多様な業務に携わってきました。最近では、文部科学省のオープンアクセス加速化事業の一環として、国立情報学研究所が提供する、研究データ管理システム「GakuNin RDM」の導入を担当しました。このシステムにより、研究室内での研究データの共有や証跡管理が可能となります。本学教職員および学生であれば一人あたり100GBまで利用可能です。詳細は情報メディア基盤センターのウェブページ (<https://imc.tut.ac.jp/research/gakunin-rdm.html>) をご覧ください。

最後になりますが、在校生ならびに本学のOB・OGおよび関係者の皆様の今後益々のご活躍をお祈り申し上げます。



柏沼 豊弘

Toyohiro Kayanuma

2000年 情報工学専攻 修了
宮崎保光 研究室1975年 静岡県生まれ
沼津高専 卒業2000年 アンリツ株式会社 入社
現 在 同上 環境計測カンパニー
ソリューション開発部 主任

縁あって技科大に編入し、3-4年時は噂通り勉強や実験レポート提出に追われ大変でしたが、元々得意だった科目は知識の定着、苦手な科目は少しでも克服する貴重な機会だったと感じます。また、同期にも恵まれ、互いに励まし合いながら勉強や遊びと充実した学生生活を送ったことに今も感謝しています。

宮崎・後藤研究室では、教授から指導を受けることは少なく、自主的行動するスタイルでしたが、未知の領域でも自ら解決すべき課題を本質的に捉え、目標と計画を立て実行するという、基本かつ非常に重要なプロセスを肌で感じ、その経験は今でも役立っています。

卒業後はアンリツ株式会社に入社し、23年間、携帯電話（スマートフォン）の開発・製造用の測定器開発に携わりました。測定器には携帯電話の送信電波の測定や受信性能の測定、接続時の通信速度や安定性の測定などが求められます。

携帯電話は3G、4G、5G、6Gというように進化が続き、それに追随すべく測定器にも最先端技術が惜しみなく投入されていますが、単に性能や価格だけでは売れない場合もあります。サポート力も非常に重要な購入動機となり得ます。

プロジェクトリーダーを担当した際は商品化前後を問わず、お客様のもとへ出向き、意見交換や製品説明に繰り広げてきました。英語が苦手な私でも、海外でお客様と製品仕様の交渉や不具合解析など様々な場面で議論を粘り強く続け、信頼を得て商談成立に至った時は、「もの」を作るのは得られないやりがいを感じることができた瞬間でもありました。

在校生の皆さんも将来、研究や開発業務などを通じて自分にとっての価値を見出し、やりがいを持ってご活躍されることを願っています。



ダン アイン チュン

Dang Anh Trung

1998年 電気工学専攻 修了
片山正純 研究室1972年 ベトナム・ハノイ市生まれ
国立鉄路高専 卒業1998年 ジャストシステム株式会社 入社
2003年 TIS株式会社 入社
現 在 同社ホーチミン駐在員事務所 所長
ベトナム高専留学生OB会会長
ベトナムIT企業2社の社外取締役
新規事業コンサルタント

高専への国費留学のベトナム留学生第1号として鉄路高専を卒業し、進路にはいくつかの選択肢がありました。「日本の暖かいところに行ってみたい」という思いもあり、豊橋技術科大を選択させていただきました。高専もそうでしたが、豊橋技術科大も留学生をとても大事にしてくださり、国際棟という宿泊施設を用意してくれたり、国際交流活動への参加機会も多く提供いただきました。様々な出会いがあり、私の人生を変えることになりました。豊橋の小学校でベトナムの紹介をした時の写真等は今でも大事にしています。また豊橋の市民の方々向けのベトナム語教室の活動もしたりしました。日本人の同級生は元より様々な国の先輩や友達ができ、私はベトナム人学部生の第1号でしたが、今では豊橋技術科大のベトナムOB会ができるほどになっています。あまり貢献できていませんが、当会の副会長として努めています。卒業してから27年経った今でもほぼ毎年豊橋に帰っています。鉄路高専時代ではチームリーダーとしてロボコンの全国大会に出場したことがあります。豊橋技術科大もロボコンに強いことは後から知りました。2002年のABUロボコン国際大会でベトナムの大学が豊橋技術科大と戦い、どちらを応援すればよいか複雑な気持ちであったことは今でも覚えています。在学中では電気電子工学科に在籍していましたが、自動制御や情報工学に興味があり、研究は情報工学科の片山先生の応用研究室でした。ここでも先生方は元より、先輩方、同期の皆さんに大変お世話になりました。今もIT業界に身を置いており、ベトナムと日本のITの交流に従事しています。これからも豊橋を第2の故郷として大切にていきたいと思います。



楠原 由紀雄

Yukio Kusuhara

1989年 情報工学専攻 修了
辰巳昭治 研究室1965年 香川県生まれ
詫間電波高専 卒業1989年 松下電器産業株式会社 入社
2008年 パナソニック株式会社 社名変更
2025年 大阪国際大学 入職
現 在 同上 地域協働センター センター長

船に乗りたい浅い思いで詫間電波高専を受験してからあっという間に45年が経過しました。高専時代はモールス信号の通信練習になっていましたが、卒研では、まだロボコンがない時代にライントレーザーのセンサー部分の設計を行なう等、研究室の仲間達とロボットの開発を行なっていました。

技術大時代にはパターン認識を専攻し、人口知能研究の黎明期にその基礎となる学問に没頭。毎週、海外論文を翻訳し、先生の前で報告するルーチンは、前日に徹夜する等、今となっては懐かしい思い出です。家庭教師のアルバイト、夏休みに富士山の頂上まで登ったのも忘れないイベントでした。

修士課程修了後、画像処理の業務に携わりたいという思いから、幾つかの会社を考えましたが、最終的に松下電器産業株式会社（現パナソニック株式会社）に就職しました。最初はパソコン周辺機器のソフト開発、10年後、コールセンター業務部門に異動し、そこでCTIシステム担当として従事。現在、コールセンターはAIの実用部門として音声認識・感情認識などが適用されており、その最先端の技術を用いて仕事をするのは楽しく充実していました。また、様々な業種から成る企業のコールセンターの方々と人脈を築くことができ、今でもその人的ネットワークは仕事をする上で役立っています。

現在は、全く毛色の異なる大学の職員の仕事を行なっています。地域・自治体から依頼がある活動を、学生に主体的に動いてもらい学びの場とする、そのような環境作りを行なっています。

大学は学問もそうですが、課外活動・人脈、様々な事で経験値を増やす場だと思います。是非、経験値を増やして社会でご活躍されることを祈念します。



山崎 権史

Kenji Yamasaki

2014年 環境・生命工学専攻 修了
水野彰・高島和則 研究室

1989年 東京都生まれ
仙台電波高専 卒業
(現 仙台高専広瀬キャンパス)

2014年 日立ハイテクノロジーズ(現日立ハイテク)入社
2016年 日立ハイテクアメリカ 出向開始
2017年 日立ハイテクアメリカ 出向修了
現在 同上 評価ソリューション開発部 所属

2014年に4系修了後、日立ハイテクに入社し、現在は半導体検査システムのソフトウェア開発を行っています。担当している製品は、半導体の回路パターンの出来栄えを計測・検査するため電子顕微鏡の仕組みを応用しナノメートルサイズの欠陥を検出できる半導体検査装置です。

仕事内容は主に画像処理やAIを用いて高速・高精度に欠陥検査を行い、半導体を製造する顧客の歩留まりを向上させるためのソフトウェアシステムの開発です。半導体を製造する顧客は国内だけでなく多くのアジア・欧米顧客がおり、出張や英語でのプレゼンの機会が多いです。4年前からチームのプロジェクトリーダーとして15人程度で他部署と連携しながら開発を行っています。

学生時代を振り返ってみると、高専では電子制御を学び、技科大では環境・生命専攻、研究室では放電プラズマを用いたNH₃生成の研究を行いました。現在はソフトウェア開発部署であり一見するとバラバラな経歴ですが、最先端技術を広く学びたいという一貫した思いがあり、分野を問わず幅広い専門分野が求められる半導体業界では強みになっています。

研究室時代に教授や先輩、仲間と乗り越えた国際学会や論文執筆経験も、海外顧客先での評価報告や技術文書執筆時など今の業務に欠かせないスキルになっていることを日々実感しています。授業や研究活動から得られる専門知識はもちろんですが、研究室生活やサークル活動、委員会活動、アルバイトなど学問以外の技科大生活から得られる経験は、社会人で成功するために必要な人間力「非認知能力」の形成に大きな影響があったと実感しています。



三浦 公平

Kohei Miura

2009年 物質工学専攻 修了
角田範義 研究室

1984年 青森県生まれ
八戸高専 卒業

2009年 出光興産株式会社 入社
2024年 同上 生産技術センター プロセス技術室
基盤プロセス2グループ ブループリーダー着任
現在に至る

高専で光触媒を知り、師事した研究室の恩師の出身というご縁で、豊橋技科大に編入しました。研究室配属では、希望通りに恩師のお師匠様である角田教授の下で研究へ取り組み、加えて、先輩、後輩、友人に恵まれ、楽しく過ごすことができました。修士1年の夏休み、角田教授より、紹介された石油業界へのインターンシップにて、現在も勤めている出光興産で5日間の業務経験をしました。何とか指導に置いて行かれないように与えられた課題をやり切り、その際のご縁で、今の会社へ入社する事が出来ました。

入社後は、触媒の研究者ではなく、使いこなす側へとなりました。また、化学工学が業務の中心となり、機械や解析、あげくは、総務、人事、経理と、広範囲にわたる知識を求められ、新しい事に挑戦し、学び続ける日々を過ごしています。勤めてからもっとも衝撃を受けたのは、ベトナムの製油所支援です。言葉はもちろん、文化、思考が違う中で同僚と助け合い、障害を乗り越えてきました。その中で得られた縁は、帰国後の自身の大きな糧となっています。

これまでの歩みを振り返ると、学びも仕事も、すべては人とのご縁の積み重ねによって形づくられてきたと感じます。新しいことに挑戦し、外の世界に飛び出することで生まれる縁が、私を成長させ、今の私をつくっているのです。

後輩の皆さんにも、ぜひ恐れずに新しいことへ挑戦して、思いがけない出会いいや縁に出会ってほしいと思います。その縁が、皆さんの可能性を広げてくれると思います。

最後となりますが、在校生、OBの皆さん、そして豊橋技術科学大学が今後ますます活躍し、発展されることを心より祈念しています。



吉田 奈央子

Naoko Yoshida

2005年 環境・生命工学専攻 修了
平石明 研究室

1976年 滋賀県生まれ
滋賀県立国際情報高等学校 卒業

2005年 名古屋大学エコトピア科学研究所 研究員
2008年 京都大学農学研究科 学術振興会PD
2011年 豊橋技術科学大学 エレクトロニクス先端融合研究所 特任助教
2013年 名古屋工業大学大学院 工学研究科 社会工学専攻 特任助教を経て2016年に准教授

2025年 名古屋大学 未来材料・システム研究所 教授
現在に至る

私は2005年3月、豊橋技術科学大学 環境・生命工学系にて平石明教授のご指導の下、博士号を取得いたしました。その後は年表に示すような流転のキャリアを経て、2025年4月より名古屋大学未来材料システム研究所の教授を務めております。この流転の良いところは、アラフィフが近づいた現在においても挑戦者としてのマインドを持ち続けられ、「今より少し無茶をする」姿勢を保てている点にあります。その原点は技科大にあります。工業高校推薦で進学して微積分に苦しみ、TOEIC400点台でドイツへ研究留学し、難易度の高い研究テーマに挑戦してオーバードクターとなつたことなど、当時は後悔もあった数々の無茶こそが、現在の私の形づくっています。そのような無茶を許し、長く支えて頂きました技科大的先生方、就学環境ならびに研究環境に、この場を借りて感謝申し上げます。

私は現在に至るまで、微生物代謝を活用した水環境浄化研究に従事しており、学位取得から20年を経て、かつての夢であった「自ら分離した微生物で地下水を浄化する」という目標も、いくつか実現できました。しかし、エネルギー・水・資源の需給バランスを持続可能に保つためには、どれほど技術を高度化・先鋭化しても、それだけでは社会に普及しないことを痛感しています。例えば廃水処理技術では、技術が優れても、排水基準や環境基準が整備されていない社会では導入されません。現在では、社会に貢献する技術を開発するだけではなく、その技術をどのように社会へ還元していくかを工学的かつ社会学的視点から考える研究にも挑戦しています。



保坂 勉

Tsutomu Ben Hosaka

1999年 エコロジー工学課程 卒業
シディキ 研究室

1976年 新潟県生まれ
長岡高専 卒業

2000年 (株)東京エレクトロンFE 入社
2003年 東京エレクトロンフランスSARL 出向
2008年 エジンバラ大学学院MBA 修了
2008年 株式会社ブチヤボン創業 代表取締役
現在 株式会社やまだ織 代表取締役

私は、冬は積雪1m以上ある長岡高専卒業後、青い海の見える生活にあこがれ、豊橋技術科学大学 エコロジー工学科に編入学しました。学生時代は、勉学だけでなく、所属の水泳部、家庭教師のアルバイトなどを通じて多くの友達ができ、たくさんのこと学びました。

卒業生の声で、学生時代にやっておけばよかった事の中に、語学力の向上を挙げる先輩方が多く、卒業後はビジネスレベルの英語力を身につけるべく、カナダへ語学留学をしました。(1年間半)帰国後は、東京エレクトロンのサービスエンジニアとして、台湾、韓国、アメリカへの長期出張、そして、3年間半のフランス出向、7か国のエンジニアと共に顧客工場の立ち上げ・技術サポートに携わり、20歳代では到底経験ができないような国際的な業務にあたりました。その後は、エンジニアとしてのキャリアを目指すのではなく、ビジネスキャリアを積むため、英国エジンバラ大学大学院MBA(経営学修士)に入学・修了し、同年、新潟県十日町市に帰郷、リサイクル着物を海外に輸出する会社を起業しました。当時はリーマンショックによる円高で輸出ビジネスには逆風下でしたが、無事、今年で19期を迎えることができました。また、コロナ禍が始まった5年前には、隣町の新潟県南魚沼市で100年以上続く絹織物製造業会社、(株)やまだ織を事業継承(M&A)し、今はものづくりに携わっています。

人生は一度きり、時間もあつという間です。在校生の皆さんには、失敗を恐れず何事にもチャレンジしてほしいと思います。そのチャレンジ精神と友達との絆は必ず、将来自分の宝ものになります。

最後に、このような振り返りの機会を与えていただいたことに、心より感謝申し上げます。



辻岡 晃

Akira Tsuijoka

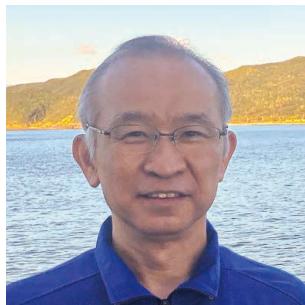
2016年 建築・都市システム学専攻 修了
松本幸大 研究室

1991年 福井県生まれ
福井高専 卒業
2016年 大日コンサルタント株式会社 入社
現 在 同上 チーフ

豊橋技術科学大学には、建築が学びたいと思い、福井高専から編入しました。元々建築志望でしたが、高専が土木よりだったため、大学での勉強は新鮮でした。建築の中でも構造分野に興味があったため、研究室は構造系の松本幸大先生にお世話になりました。研究は、解析メインでしたが、実験があれば研究室総出で行いました。夜遅くまで実験準備をしたり、研究室でお疲れ会や忘年会をしたことは楽しい思い出です。仕事については、構造系を軸に就活をする中で、橋梁設計に従事したいとの思いが強くなり、岐阜県に本社を置き、橋梁分野に強みのある大日コンサルタント株式会社に入社しました。建築と土木を学んだ結果、現在は土木分野に従事しています。

入社してからは、新設の橋梁設計に3年半従事した後、約4年間、施工管理業務に従事しました。施工管理では、NEXCO中日本の新東名高速道路事業に携わり、高架橋の上部工工事と側道工事を担当しました。実際にモノができていく様を間近で見て、設計にフィードバックする点も数多くありました。設計部署に戻ってからは、現場の経験を活かし、橋梁の新設と補修補強の設計に従事しています。

社会に出ると様々な課題に直面します。それを乗り越えるためには、常に勉強が必要ですが、モチベーションが上がらないこともあります。そんな時、良い刺激、力となるのは、同じ志を持って学び、努力してきた先輩、同級生、後輩の存在です。大学時代には、そんな存在をたくさん作っておくといいと思います。大した経験はしていませんが、結局は「人」です。人の出会い、つながりを大切にしてください。



羽上田 裕章

Hiroaki Hajota

1993年 建設工学専攻 修了
河邑真 研究室

1968年 京都府生まれ
舞鶴高専 卒業
1993年 新日本製鉄㈱ 入社
2005年 一般財団法人 国土技術開発センター 出向
2007年 新日鉄エンジニアリング㈱ <分社化> 岩佐
2019年 日鉄エンジニアリング㈱ <社名変更>
現 在 同上 海底資源開発事業化推進室長

技科大の顔への寄稿のお話をいただいたとき、日常の生活リズムと違う時間が一瞬流れたような、不思議な感覚を覚えました。大学を修了してから、気が付けば32年と数か月。日々の生活の中で過ごす自分と記憶の中にある大学時代の自分にどこか不連続なものを感じつつも、研究、アルバイトや飲み会などに興じた学生時代の思い出が蘇りました。大学では河邑研究室に所属し、土を微視的に捉え、巨視的な特性を評価する研究に取り組みました。大学修了後は、製鉄会社のエンジニアリング部門で、社会インフラへの鉄の利用拡充を目指した技術開発やインフラの設計に携わり、また財団に所属して障がい者の方が自律して移動できるインフラのあり方に関わる仕事にも従事しました。現在は国産資源として期待される海底エネルギーや海底鉱物の資源開発に関わっており、振り返れば多くの年月を技術開発と事業開発に費やしてきたことを実感します。

大学時代の研究を通じて、ありたい姿を描き、それに向けたアプローチを組み立て、実行・評価し、再び組み直すといった思考を体的に学ばせていただいたおかげで、会社人生の多くの時間を新しいことに挑戦できる環境で過ごすことができたのだと、改めて感謝しています。

冒頭で、現在と大学時代の自分の不連続について触ましたが、大学時代からの連続性もあります。関東在住のゼミ仲間と年2回のゴルフ＆麻雀旅行、なぜか定期的に上京する野球同好会の某氏等との飲み会、漫画本が豊富に置かれていた隣接研究室のOB・OG会へのお邪魔など、豊橋技術科学大学 旧6系に編入できたことも私にとって好機でした。記憶との不連続性を楽しみながら、これからも日常のリズムの中で流れる時間を大切に過ごしていきたいと思います。



中 優登

Masato Naka

2014年 建築・都市システム工学専攻 修了
松島史郎 研究室

1990年 宮城県生まれ
宮城高専 卒業
2014年 住友林業株式会社 入社
同社 住宅事業本部 名古屋支店設計G
2022年 同社 設計G デザイナー
2024年 同社 設計G チーフデザイナー
現在に至る

絵や工作が好きだったので建築も面白そうかもといった軽い気持ちで高専へ。そこで知見が広がり、さらに別の世界に身を置いてみたいと技科大へ。大学では建築サークルを立ち上げ、仲間とともに地域にも飛び込み、様々な人と関わり、多くのモノを作り出しました。大学でのそういう経験を通して、リーダーシップや、目上の人や立場の異なる人たちとのかかわり方や、段取り、そういうソフトの面は身に付き役に立っているように思います。

私はいま、住宅の設計を主な仕事としています。お客様が一生に一度の家づくりを、大金と共に預けてくれます。人の人生を左右する、人生一大イベントを担うといっても過言ではない仕事です。家づくりとは不思議なもので、お客様の個性と、設計者の個性が共鳴してひとつの家になっていきます。私の価値観や経験、感性で、お客様の好みを引き出し、心の奥になる要望を理解し形にする。この仕事をし始めてはじめて、何にもつながらないような経験も自分の糧になっていたのだと感じました。私は今、デザイナーとしてももちろん空間や家の外観もデザインしていますが、お客様家族の「生活のデザイン」がデザイナーとしての根底です。そこには技術・工学的だけではない、感情や会話があります。表情や言葉のニュアンスをくみ取り、言葉や絵で表現して共有してともに形にする。例えば、「家族の気持ちが柔らかくなる家が欲しい」という言葉と一緒にかたちに落とし込んでいく。そして、お金をもらっているはずなのに、最後には「ありがとうございます」と言ってもらえるそんな仕事です。技科大で数字や技術を目の当たりにし、実はちょっと苦手かもという方いかがでしょうか。同じ技術者でもこんな仕事もありますよ。



矢野 公徳

Minoru Yano

1988年 建設工学専攻 修了
北尾高嶺 研究室

1963年 大分県生まれ
大分高専 卒業
1988年 鹿島建設(株) 土木本部 入社
2023年 同上 環境本部 本部次長
2024年 鹿島建設(株) 退社
2024年 鹿島環境エンジニアリング(株)
常務取締役 北海道支店長
現在に至る

学部、院ともに北尾研究室で水処理の研究をしていました。ゼミで英文の論文を訳して発表するのですが、まったく苦手でした。また、修論も実験の成果が出ず、ほぼ木曾先生に執筆してもらった出来の悪い学生でした。さらには修士2年の時にアメリカ1周の旅に2ヶ月間出て、帰ってきた時の木曾先生の怒りの顔が今でも目に浮かびます。

こんな私が、日本一の建設ビックプロジェクトに携わりたいとの熱い想いが通じたのか鹿島建設に就職することができました。鹿島建設時代は、ほぼ現場一筋でした。建設現場では、数百人の社員、作業員が働きます。一人では何もできません。本当にチームワークの大切さを学びました。また、成功よりも失敗から学ぶ大切さを学びました。現在は鹿島建設を退職して、100%子会社の鹿島環境エンジニアリングにいます。

ご縁があって今年の5月に母校の非常勤講師を務めさせていただきました。左の写真がその時のものです。テーマは、「コンプライアンスと技術者（安全）」でした。私の建設現場での失敗談を語りました。学生の若いパワーをもらい元気になりました。人生、いくつになってもいろんな意味で学びが必要だと痛感しております。最後にますます豊橋技術科学大学の発展を心から願っています。

